面
PERSONA
KAZUKI takoka TAKADA
高田一樹写真展
2013年
7月5日（金）～16日（火）
13:00～20:00 （水・木休廊）
大阪日本橋
アートスペース「亜蛮人」
・WEBSITE
http://www.takoland.com/
・FACEBOOK
https://www.facebook.com/takoland
・mail
takoland@gmail.com

『人の多面を写す』

高田一樹氏は、光と被写体の調和を重視する写真家である。それは、氏の作品を目の前にした多くの方が感じる事だと思う。光や空間の持つ、自然であるが故の不自由さと向き合うため、追求の歩みを止めることのない写真への姿勢。
しかしそれ以上に、高田氏の表現方法には、人間への眼差しが強く感じられる。目の前に存在する人間を「とる」のではなく、その人間からにじみ出てくるもの、こぼれてくるものをフィルター越しに発見し、拾い上げる。個々の被写体が持つ外面や内面に対する肯定や否定、といったわかりやすい二分法ではない、人間存在そのものの複雑さを受け止める視線があるのだと思う。そう、人間もまた、自然物なのだから。おそらく高田氏は人間の多様性を深く考察しつつ、被写体と向き合っている。
今回の個展「面」は、そんな氏の写真を存分に感じられる作品群となるだろう。外面と内面、その間にある、名づけ得ない面、あらゆる人の「面」を映し出す事は、氏の本領だ。
現代社会に生きる我々は実に多くの「面」をカバンに詰めて歩き回っている。カバンの中から選んだ一つの「面」をつけるということは、自己を隠匿する行為にも受け取られがちだ。けれど面をつけた時に現れる姿もまた、一つの顔なのではないか。
私は高田氏の被写体という経験を重ねる中、一瞬を切り取る写真の中に自らを固定するのではなく、ある自由を感じ始めている。今まで出会わなかった自分自身との遭遇。それは自己という檻や社会という束縛を否定する自由とは全く違う。時には「面」を被った姿、時には「面」を外そうとしている姿、時には「面」を取り去った姿、時には再び違う方法で「面」をつけてみようとする姿。けれど、それは結局のところ、同じなのだ。独りの人間の中に様々な「面」があり、それだけに見極めることが困難なありようを拾おうとする写真家の前では、被写体がどう取り繕うが、同じ。取り繕いようのない自由。
光や空間や人間といった、移ろい、掴み切れないものを見つめ続ける高田一樹氏にとって、「面」とは撮影を通して発見する人間の様々な顔なのだと思う。
最後に。多くの被写体の、多くの「面」を拾い上げる高田氏に、私は一度尋ねてみたい。
「高田さん、あなたはいったい、何面体なのですか?」

蒼井橘（モデル）

『陰影を召喚する写真家』

氏の作品では陰影それ自体が一つのモチーフとして扱われている ―― 常々その様に感じていた私は、ある夢想的な仮説を思い描くに至った。
それは、「氏は陰影という名の精霊を召喚することが出来る」というものである。
写し出されたモデルは皆、彫像的な美麗さと静謐さに満ちており、その姿は、まるで身を捧げ祈る巫女の様である。
また、繊細なバランス感覚で構成された画面からは、抽象絵画の様な調和とリズムが醸し出されており、それは清められた儀式の場の如くである。
こうして舞台は整い、氏は巫女たるモデルと協働して召喚の儀式を執り行い、決定的な価値と魅力をもたらす“何者か”を現出させるのだ。その何者かこそが“陰影という名の精霊”である。
それは、モデルの身体に憑依することや抽象的な形態で以って、見る者を静かに強く見つめ返してくる。
写真家、モデル、そして召喚された陰影という三者が生み出す独自の作品世界。
そこからは妖しい夢幻性やタブーへの魅惑、更には聖なるものの清浄さすら感じ取れることだろう。
今回の個展を通じて多くの人々が、この陰影という名の精霊と出会い魅了されることを願って止まない。

物江真晴（作曲家 http://sakkyoku.surukotoba.com）

『裸の女性の視線が気になる』

カメラの前で自ら服を脱ぎ、裸になった女はいったい何を見ているのだろうか。
自分に向けられる即物的な眼差しを知ってか知らずか。
レンズ越しにこちらを見つめ返してくる瞳の、挑むような、なじるような、訴えるような、悲しむような翳り。
裸になった女は帰り得ぬあの日の自分を遠い瞳で見ている、そんな気がしてならない。
高田一樹の写真、撮影者の一方的な作為を避け合成加工を極力廃したその作品と向き合って、生まれ出た言葉をそのまま記した。

上田哲郎（ギャラリー「亜蛮人」オーナー）

高田一樹　略歴

幼少期より祖父の薫陶を受けて写真撮影に親しむ。二十一世紀に入った三十代半ばの頃から、当時主催していた劇団所属女優の協力を得て人物写真作品をつくりはじめる。
その後何人かのモデルと出会い今の作品傾向を徐々につくりあげつつ、二〇〇七年からは一人のモデルと共に「灯火幻」の名でユニット活動を展開。その間、フォトテクニックデジタル誌をはじめとした雑誌のグラビアに作品が採用掲載され、また富士フィルムのフォトコンテストで審査員特別賞を受賞。
二〇一三年からはユニット活動を休止し、ふたたび多くのモデルと共に作品作りを続けている。
本人の言葉　「私は作家であるよりも優れた装丁師でありたい。癖が強く存在感を強烈に主張しながらも書物ひとつひとつをその内容に合わせて良く飾り、文芸の個性を引き立てる装丁。ひとたび書物が開かれたらけっして邪魔にならず裏方に隠れる、そんな写真が理想である。」

高田一樹(Kazuki takora Takada)個展

面 persona